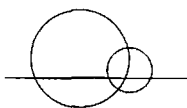


〔学習法で学んだこと〕



## 「東亜同文書院」について学んで

経済学部1年 浅井幸正

私は、学習法の時間に習った「東亜同文書院」から学んだこと感じたことをまとめました。

### 1. 東亜同文書院と創設者たち

まず、東亜同文書院は1901年に中国の上海に設立された、日中提携のための人材育成を目的とする高等教育機関であり、1945年の敗戦により閉学するまでに5,000人もの卒業生を送り出しました。日本人が海外に設立した学校の中でも古いもののひとつである。

つぎに、東亜同文書院創設に関係のある人物の説明をします。

- 近衛篤磨 東亜会と同文会が合併して生まれた東亜同文会の初代会長である。
- 荒尾 精 上海に日清貿易研究所を設立し民間人の立場から大陸研究を主導。日清貿易研究所は彼の死後設立された東亜同文書院の前身となりました。
- 根津 一 軍人として日清戦争に従軍する一方、上海の日清貿易研究所の運営にあたり、また東亜同文書院の初代、第三代院長として日中間で活躍する人材の育成に努めました。

### 2. 書院生の意識

東亜同文書院は、東亜同文会が中国側公認の下に、中国に開設した日本の最高教育機関でした。しかし、学生を入学させる十分な資金がなかったために、県の資金でもって学生を集め、各県を回り県知事に一県あたり二人の給費生を送るように依頼し、見事実現させました。

東亜同文書院の特徴としては学生の大半が各府県からの派遣生であり、北海道から沖縄まで幅広く分布しており、中国や朝鮮まで広がっていたこともわかりました。

そして、初代院長根津一は徳育や知育、さらに日中友好の実務に役立つ人材育成と人材形成に主眼を置き、書院の学生が中国大陸の中で勉強し、中国を理解し、中国の民衆を親愛する伝統的な「根津精神」、「書院精神」をうみ、のちに書院生に大きな影響を与えることとなります。彼の存在は約二十年に及び、その間に育まれた理想と精神は、書院の歴史の中に伝統となって最後まで行きました。

### 3. 書院生たちの中国大旅行

書院生たちの中国旅行の始まりは「西域大旅行」からでした。学生は北京や漢口以外にも行きたいと思っていたが学校にはお金がないと言う困った状況が初期にはあったが、日英同盟が結ばれたことによりイギリスから日本政府にロシアがいまの

西域に入り込んできたため調査が依頼されました。政府には手段がなかったため、根津院長に頼みました。そして、「西域大旅行」が成功したことで外務省から報奨金として3万円が渡され、中国旅行ができるようになりました。書院生の旅行ができるようになったのは1907年からです。みな頭だ袋を持って、ゲートルも学校が提供してくれて、各チームにライカのカメラを一台ずつ渡された。だいたい2人から6人の班が毎年10班、5月から9月頃まで旅をします。船や鉄道にも乗りますが、彼らはほとんど歩いていました。

また、中国の各知事が書院生の護衛のために兵隊を提供してくれました。そのおかげもあり、現地で病死した人が何人かいましたが、それ以外の事故でなくなったということはありませんでした。しかも、当時軍閥間の激しい戦争もあり、また強盗団の土匪も出没していたのでなおさらです。

#### 4. 書院生の中国研究

書院生たちは、農村を中心に歩きました。当時中国のインテリ層の人たちは、農村に偏見を持っていたので、中国の研究者は調査をしていませんでした。だから、彼らの記録はとても重要な資料となったのです。そして、旅の記録はすべて写真と図や絵で残してあります。〈どれくらいの人口があつて、どんな人が住んでいるか〉などさまざまです。そしてその記録は今でも本として残されています。

「清国通商総覧」は、日清貿易研究所の学生によって集められた商取引やその他の情報をベースにのちに根津一によって書かれた商業地理本である。

「支那経済全書」は、学生の調査報告がそのまま出版された。都市・農村・人口など当時中国はこのような実態報告がな

かったためとても重要。

「支那省別全誌」は、西域調査が成功した後、中国や東南アジアの調査が行われるようになり、地誌として全18巻が刊行された。

これが、大学へ昇格する一つのきっかけとなりました。

#### 5. 東亜同文書院のその後と愛知大学

敗戦にともない東亜同文書院大学は廃校になり、経営母体の東亜同文会も解散を余儀なくされました。その後、残務整理を経て上海から引き揚げてきた本間喜一学長などの関係者は、1946年5月、旧学生・教職員を収容する新大学を国内に設立することを決定しました。

しかし設立にあたって、GHQが東亜同文書院大学そのままの大学では認可できないと条件をつけたため、旧書院側は「新大学は東亜同文書院とは無関係」との声明をよぎなくされました。そして、設立されたのが愛知大学です。また、東亜同文書院の伝統はどういう風に残っているかということ、本間学長の指示で持ち帰られた学籍簿その他が保存されています。中日大辞典も刊行しており、中国に残してきたカードと一緒に返してほしいと中国政府に直訴し、周恩来首相に送ってもらいました。

そして、愛知大学は、周恩来首相が卒業した南開大学と協定を結び、日本の大学で初めて中国の大学と協定しました。そういう形で今でもいろいろな中国の大学やそのほかの国の大学と交流していますが、やはり中国との交流が強いようです。

#### 【感想】

僕がこの大学に入学したとき東亜同文書院があることや大学の歴史の中でとても重要なものであったことは知らなくて、興味もありませんでした。

授業内での話や教科書を読んでいくうちに東亜

同文書院の創設者の中国との友好的な関係を持つようとする気持ちや書院生の中国へ対する思いに感心しました。

あと一番印象に残っているのは、書院生の大旅行のときに中国側が護衛の兵士を提供したことです。当時、日中関係はよかったとは言えません。普通なら手助けする意味もなかったはずで

し、大旅行が成功したのは中国の協力があったこそだと思います。

これからも協力し合ってお互いに協力し合っていってほしいと思います。

また、東亜同文書院についての貴重な講演会も聞けたのでよかったです。